

# 薬剤耐性（AMR）対策アクションプランの進捗

## 医療分野からの報告 2025年度時点

国立健康危機管理研究機構 国立国際医療センター

AMR臨床リファレンスセンター

大曲 貴夫



# 「医療従事者向け」教育啓発活動実績

## 主催セミナー

- AMR対策臨床セミナー（A）39回 延べ7,444名**
  - 対象はすべての医療従事者
  - 2023年まではAMRCRCスタッフと開催地域の専門家がAMR対策の基本の解説を実施
  - 2024年は「抗微生物薬適正使用の手引き第3版」の解説を目的に、執筆協力医師による講義を実施
  - 2025年は「入院診療」「急性下痢症」「外来診療（かぜ）」「眼科」など、テーマごとの抗菌薬適正使用について専門医師が解説を実施
- かぜ診療ブラッシュアップコース（B）11回 延べ404名**
  - 「抗菌薬適正使用の手引き第一版」に準拠し、かぜ診療に特化して診断、治療、コミュニケーションを解説

## 公衆衛生セミナー

- 全国保健所長会 地域保健総合推進事業 薬剤耐性(AMR)対策等推進事業の中で講義と事例検討を組み合わせたセミナー（C）を開催 10回 延べ822名（～2024年度）**
  - 各地の自治体が開催する講習会等にも講師を派遣

## eラーニング

<https://amrlearning.ncgm.go.jp/>

登録数（2026年1月17日現在）**9,444名**（医師45.2%、薬剤師23.0%、看護師14.3%、臨床検査技師4.9%、その他12.5%）

厚生労働省：薬剤耐性に関する臨床情報センター事業

2017年度		
東京都、仙台市、高松市、名古屋市、札幌市、福岡市	A	計518名
京都市	B	45名
福岡市	C	36名
2018年度		
大阪市、盛岡市、福井市、横浜市、岡山市、熊本市	A	計503名
金沢市、千葉市、徳島市、東京都	B	計115名
茨城県、大分県、佐賀県、青森県、高知市、鹿児島県	C	計400名
2019年度		
広島市、旭川市、青森市、松江市、宇都宮市	A	計370名
神戸市、岐阜市、新潟市、福岡市、松山市	B	計97名
福岡市、平塚市	C	計97名
2020年度		
鳥取市（Web）		
奈良市/東京（現地、Web）	A	計605名
東京（Web）		
2021年度		
前橋市（現地、Web）		
東京（Web）	A	計679名
東京（Web）	B	計147名
2022年度		
姫路市		
東京（現地/Web）	A	計554名
東京（/Web）		
2023年度		
大阪市、東京（現地/Web）、東京（Web）	A	計962名
2024年度		
名古屋市、大阪市、東京（現地/web）		
東京（web）×5回	A	計2,160名
東京（Web）	C	64チーム、386名
2025年度		
東京（Web）×5回	A	計1,320名
東京（Web）	A	3月開催予定
東京（Web）	C	64チーム、 （人数報告未）

# 一般国民向け教育啓発活動

厚生労働省：薬剤耐性に関する臨床情報センター事業

## 資材提供



- ▶ 様々な資材提供を行い、一般国民を対象としてAMRに関する知識の普及を図る
- ▶ 資材はウェブサイトから年間を通してダウンロード可能



## 提供可能な資材

- ◆ ポスター、リーフレット、ブックレット
- ◆ 動画（小学生～一般向け）
- ◆ AMR対策カレンダー
- ◆ インフォグラフィックス等

## ウェブサイト運営



- ▶ 教育啓発を目的としたウェブサイト「かしくく治して明日につなぐ～抗菌薬を上手に使ってAMR対策～」を運営
- ▶ 抗菌薬やAMRに関するわかりやすい説明記事、視覚的に訴える資料の提示、AMR対策の優良事例の紹介



## ブース出展（イベント）

- ▶ 2025年8月6, 7日に開催した「こども霞が関見学デー」に参加し、教育啓発を目的としたブースを出展



## SNS

- ▶ SNSを通じた国民向け情報発信を実施



## メディアへの発信（リリース）

- ▶ プレスリリースやニュースレターを作成



# 薬剤耐性 (AMR)対策推進月間 (毎年11月)

厚生労働省：薬剤耐性に関する臨床情報センター事業

## ポスター、ノベルティ配布

- ▶ TVアニメ「はたらく細胞」とコラボレーションし、薬局や医療機関を通じて一般の方々にポスター・ノベルティを配布し、啓発を行っている



## 薬剤耐性啓発イベント開催

### ▶ サイエンスアゴラ

科学技術振興機構が主催する青少年向けイベント。お台場のテレコムセンタービル/日本科学未来館で開催。



### ▶ 渋谷マークシティイベント

渋谷駅前のイベントスペースで、普段薬剤耐性に関する情報に触れる機会の少ない方にも情報提供することを目的に開催。



## AMR啓発動画

- ▶ 人気YouTubeチャンネルとコラボして、AMRに関する教育動画を制作し、YouTubeで一般公開 (約90万回再生)



## 薬剤耐性神経衰弱ゲーム



- ▶ AMRについて、ゲーム感覚で楽しみながら学ぶことが出来る体験を提供

- ▶ タブレットを使用し、主にオンサイトイベントで活用。AMRに関するメッセージも表示

## 薬剤耐性あるある川柳

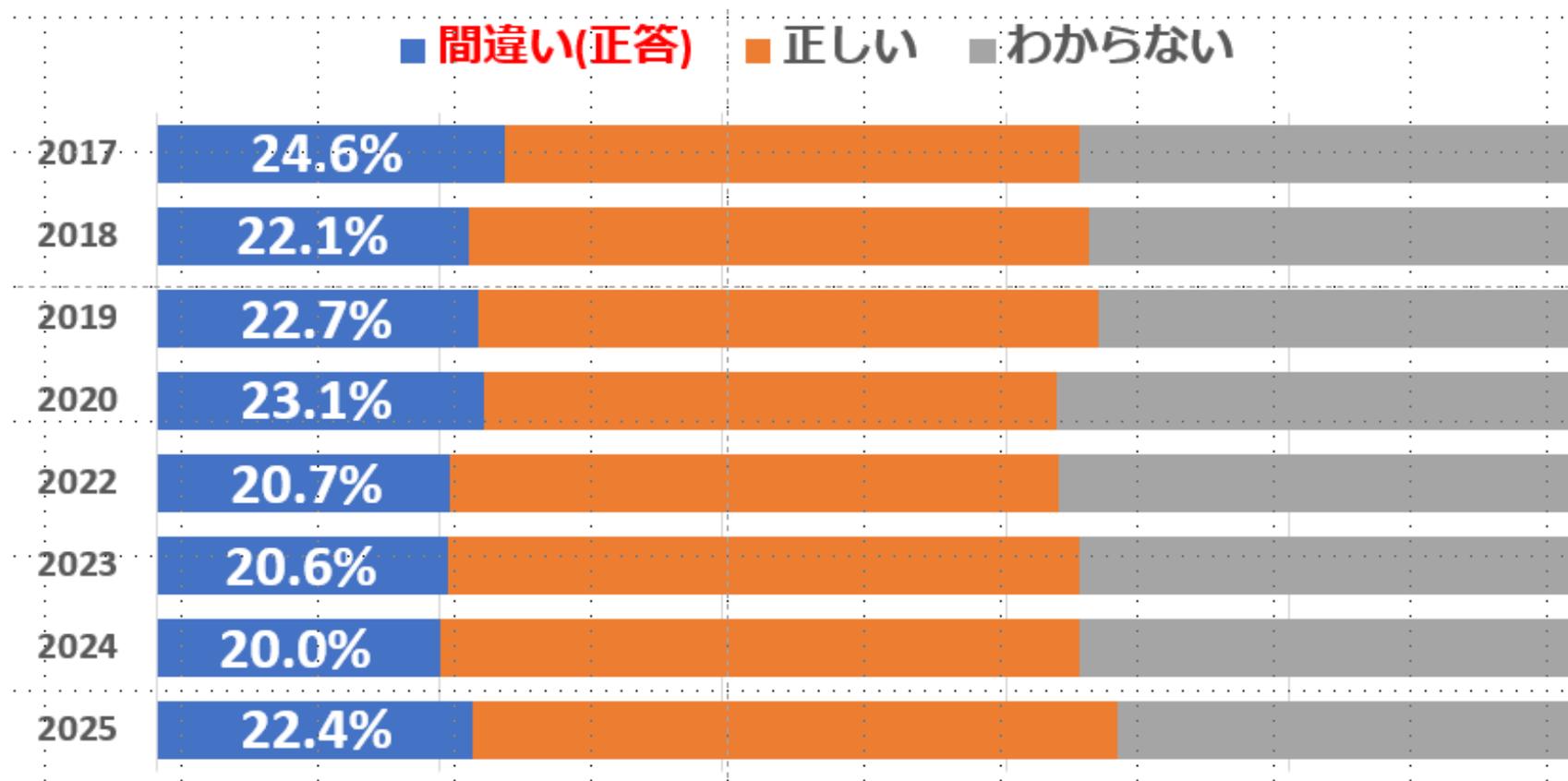


金賞  
処方しない  
その選択も  
医療でしょ！  
薬師きは

- ▶ 薬剤耐性をテーマとした川柳作品を募集
- ▶ 約1600点の応募あり
- ▶ 優秀作品を選出し、表彰する

# 国民の薬剤耐性に関する知識: 正答率の改善は認められない

## Q. 風邪やインフルエンザに抗菌薬（抗生物質）は効果的だ



薬剤耐性ワンヘルス動向調査検討会 薬剤耐性ワンヘルス動向調査年次報告書 2024. <https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/001447793.pdf>

令和6年度厚生労働行政推進調査事業費（新興・再興感染症及び予防接種政策推進研究事業）「薬剤耐性（AMR）アクションプラン2023-2027年の実行における課題解決のための研究」

# 教育・啓発上の現状評価と今後の方向性

1. 国民の知識や意識は数値での改善は依然として見られていない
2. 感冒の診療において抗菌薬適正使用の意識は向上している
3. 抗微生物薬適正使用の手引き 第4版が公開された



## 国民向け

- a. 国民の知識や意識で改善が認められない原因の追究
- b. 大目標（AMRによる疾病負荷の軽減）に関連性の強い新たな評価指標の検討
- c. 協力団体との増加・連携強化による重層的な情報提供

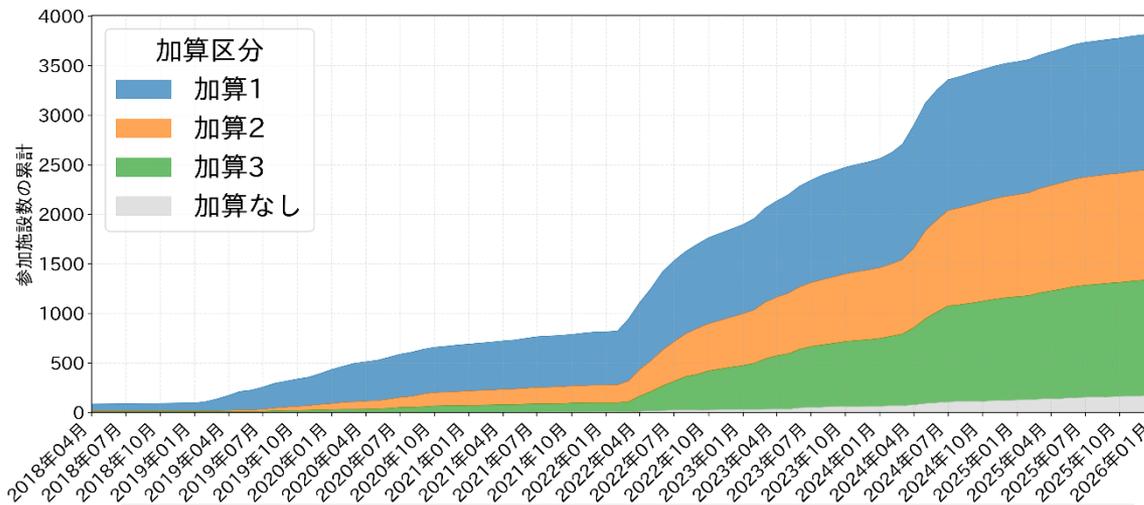
## 医療従事者向け

- a. 専門教育での教育の拡充の推進および支援
- b. 適正使用に向けた診断・コミュニケーション向上の支援

# J-SIPHE参加施設数は継続して増加

※2026年1月16日時点

## J-SIPHE参加施設数の推移



## J-SIPHE参加施設数統計（最終年月時点）

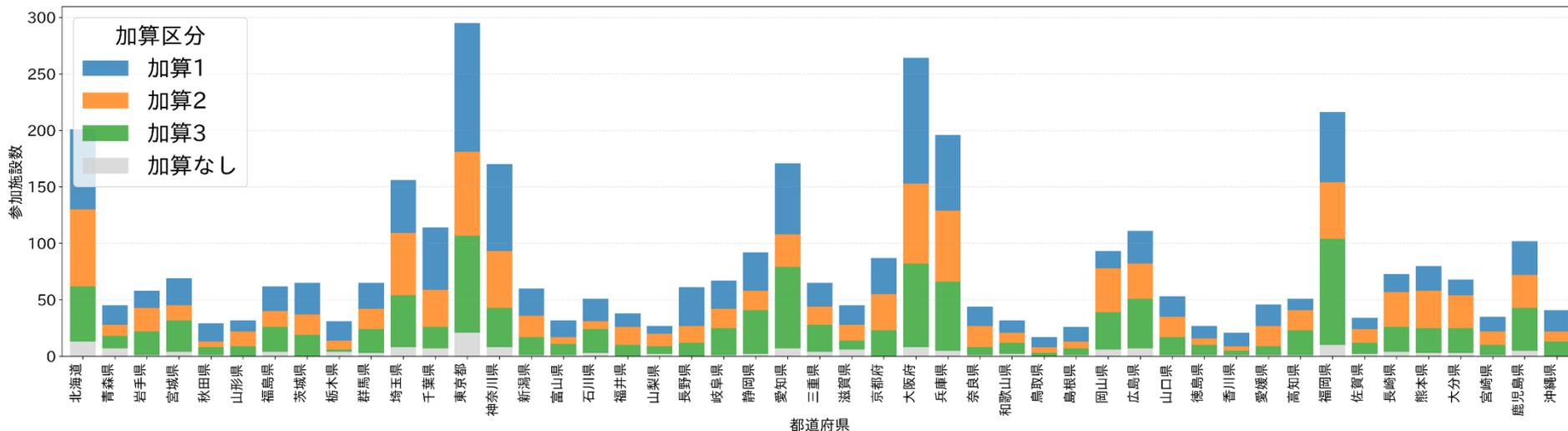
加算区分	累計施設数	割合(%)
加算1	1368	35.8
加算2	1111	29.1
加算3	1168	30.6
加算なし	171	4.5
合計	3818	100.0

2022年4月より**加算要件+加算3追加**、2024年4月より**抗菌薬適正使用支援体制加算要件**

### ＜課題＞

- データ登録（利用状況）の実態が見えにくい
- データ登録の実態と障壁の調査の検討

## 都道府県別J-SIPHE参加施設数



# 診療所版J-SIPHEも参加診療所数は増加中

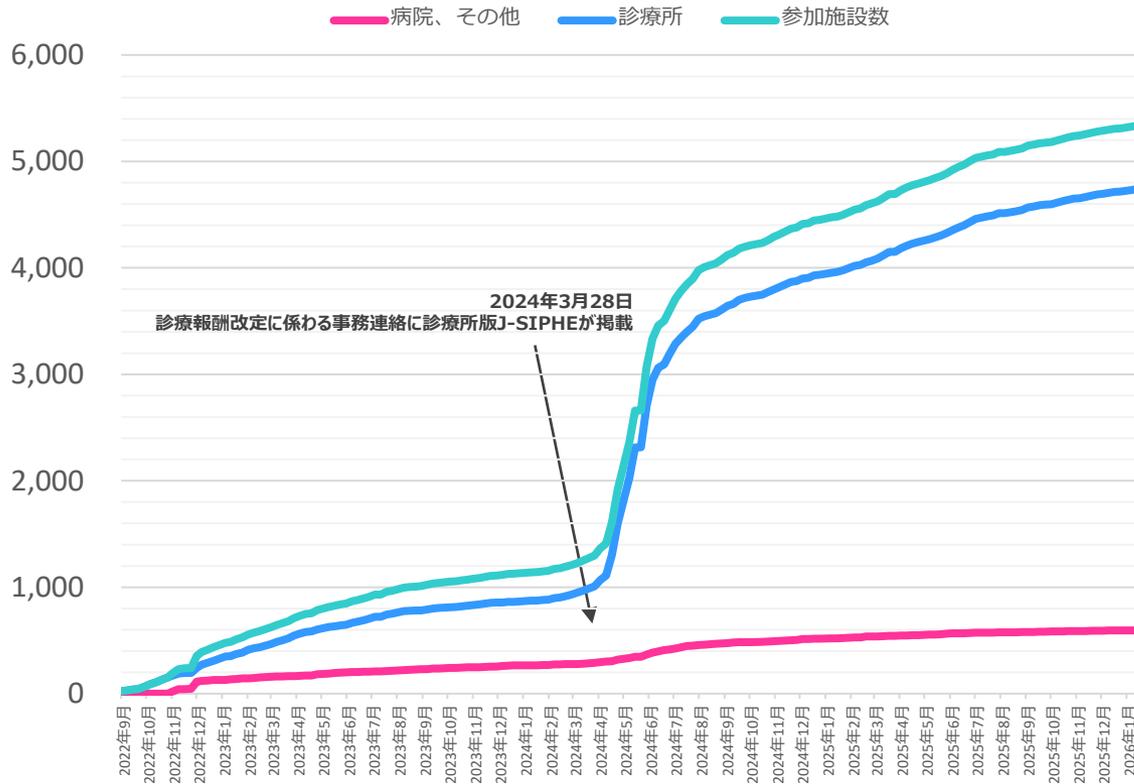


## 診療所での抗菌薬使用状況の **可視化** を実現

### 気道感染症、かぜや下痢症への不必要な処方が多い抗菌薬

- 初診（傷病名を付けた受診）に対する抗菌薬やその他の処方薬の振り返り
- 気道感染症、下痢症、耳鼻疾患、中耳炎、尿路感染症、皮膚・軟部組織、肺炎の関連傷病名について傷病名グループ別に分析
- 時系列的な推移、前年比較（月ごとの集計）
- 地域や診療科別のデータと比較
- JANISデータとの連携
- 任意のグループ内の分析・活用

### <診療所版J-SIPHE参加施設数の推移>



### <参加施設状況> 2026年1月21日時点

診療所：4,751 施設

病院、その他：594 施設（482 グループ）

計：5,345 施設

### <課題>

- データ処理のパフォーマンス改善
- 導入資材の拡充および、活用事例の紹介
- 登録データの活用
  - 診療所へのフィードバック
  - 地域連携グループでのデータ活用
  - 年報の作成、公開
- 参加施設の少ない地域、診療科への広報活動

# 医療療養病床・高齢者施設における抗菌薬使用状況は 3-4年に1回の質問紙調査にて把握している

施設 [回答施設数]	抗菌薬使用率 (抗菌薬使用者/入所者)	主要感染症	主要抗菌薬種類 (全感染症)
医療療養病床 (医療機関)  [82]	<b>9.4%</b> (630/6,729)	肺炎 (39.5%) 尿路感染症 (26.8%) 気管支炎 ( 3.8%)	注射用第3世代セファロスポリン系 βラクタマーゼ阻害剤配合ペニシリン系 カルバペネム系
介護老人保健施設 (老健)  第一回 [126]  第二回 [ 98]	<b>1.7%</b> (172/10,148)  <b>1.3%</b> (110/8,291)	尿路感染症 (46.1%) 肺炎 (19.1%) 上気道炎 ( 7.2%)  尿路感染症 (51.6%) 肺炎 (15.4%) 蜂窩織炎 ( 7.7%)	フルオロキノロン系 第3世代セファロスポリン系 βラクタマーゼ阻害剤配合ペニシリン系  フルオロキノロン系 第3世代セファロスポリン系 ペニシリン系
介護老人福祉施設 (特別養護老人ホーム)  第一回 [137]  第二回 [157]	<b>1.0%</b> (94/9,044)  <b>1.1%</b> (108/10,225)	尿路感染症 (31.5%) 肺炎 (15.1%) 上気道炎 (12.3%)  尿路感染症 (48.3%) 肺炎 (12.6%) 上気道炎 ( 9.2%)	フルオロキノロン系 第3世代セファロスポリン系 マクロライド系  フルオロキノロン系 第3世代セファロスポリン系 第2世代セファロスポリン系

## <課題>

- 質問紙調査法による回答負担感および回収率の低さ
- 施設内における感染症診療、抗菌薬適正使用支援の推進

今後の医療のあり方の変化を見据え、医療機関との連携の枠組みから広げていけないか

# サーベイランスにおける現状評価と今後の方向性

1. 病院だけでなく診療所からも、AMR対策に関するデータが取れるようになった
2. 高齢者施設の状況を知ることが難しい



1. J-SIPHE、診療所版J-SIPHEへの参加施設を増やし、感染対策および抗菌薬適正使用への利活用を促す。
2. データを活用した施策への提案を行う
3. 薬剤耐性菌のデータ（感受性試験結果、ゲノム情報）と患者情報との連結（今後研究を進める、疾患負荷などを知るために重要）
4. 介護データベースなどを活用し高齢者施設からデータを得る（今後研究を進める）

# 目標3 感染予防・管理 に関する活動

## 感染対策向上加算を用いて地域の病院・診療所における感染防止対策の推進

1. 個別の医療機関の対策の質向上
2. 医療機関間の連携による対策の質向上
3. 感染対策の結果をJ-SIPHEを用いて共通の指標で管理

# 「抗微生物薬適正使用の手引き第4版」の発刊

現場での普及促進のため、手引きの「主な対象者」の表を外来編・入院編・歯科編に挿入  
抗菌薬の不適正な使用を減らすことに重きをおいて概説

医科編	第3版からの主な変更点
外来編	<ul style="list-style-type: none"><li>新規項目追加 「抗菌薬のAWaRe分類とは」 「COVID-19」 「在宅における抗微生物薬適正使用について」 「皮膚軟部組織感染症」</li><li>内容整理 「患者・家族への説明」の例示は、 AMR臨床リファレンスセンターHPに掲載</li></ul>
入院編	内容整理、既存の項目について時点更新
薬剤耐性菌感染症の抗菌薬適正使用編	内容整理、既存の項目について時点更新 診断・治療のフローチャートを作成
歯科編 <新設>	主な記載内容
歯科編	術後の予防投与および歯性感染症の治療、 ペニシリンアレルギーが疑われる場合の対応、 流通状況を考慮した治療薬の選定、等
要約版	臨床現場への手引きの普及啓発媒体として作成

# 「抗微生物薬適正使用の手引き」を用いたセミナー

## 2024年度

- AMR対策臨床セミナーとして、5回に分けて「抗微生物薬適正使用の手引き 第3版」の解説セミナーを実施
- 「抗微生物薬適正使用の手引き 第3版」の内容に基づき、専門外の医療者は学ぶ機会の少ない皮膚科領域の抗菌薬適正使用に関するセミナーを実施

## 2025年度

- 「抗微生物薬適正使用の手引き 第3版」の内容に基づき、「眼科」「入院患者」「急性下痢症」「かぜ（成人）」「かぜ（小児）」の各テーマについて解説セミナーを実施
- 2026年1月16日に公開された「抗微生物薬適正使用の手引き 第4版」に掲載された「歯科編」の内容を解説するセミナーを開催予定

## 2024年度

入院患者（名古屋市）	計476名
外来患者：成人（大阪市）	計188名
外来患者：小児（東京）	計151名
薬剤耐性菌①（web）	230名
薬剤耐性菌②（web）	279名
皮膚科（web）	227名

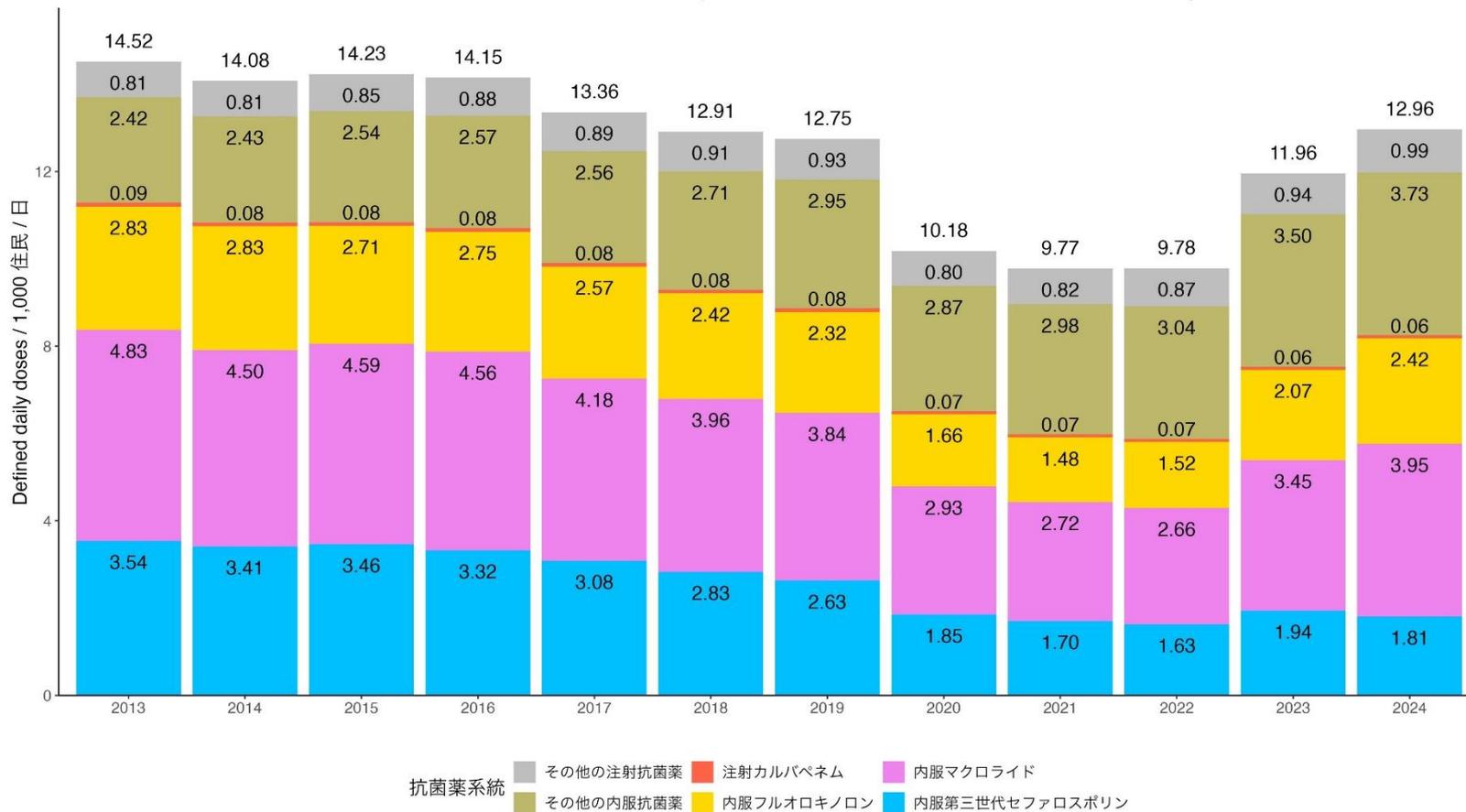
## 2025年度

眼科（web）	233名
入院患者（web）	418名
急性下痢症（web）	296名
かぜ：成人（web）	239名
かぜ：小児（web）	134名
歯科（web）	3月開催予定

厚生労働省：薬剤耐性に関する臨床情報センター事業

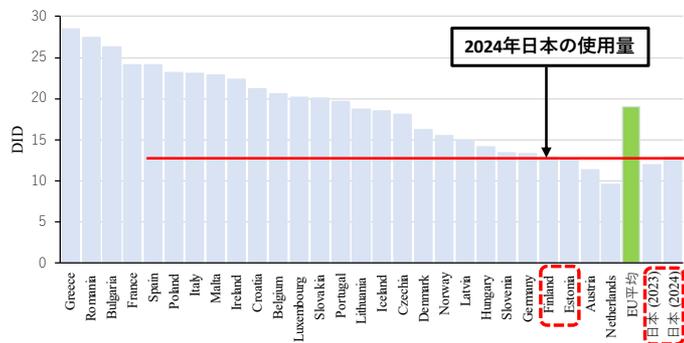
# ヒト用抗菌薬の販売量は、2020–2022年の間では著明に減少したが 2023年、2024年には増加

全国抗菌薬販売量推移 2013-2024  
(AMR対策アクションプラン 2023-2027成果指標による集計)

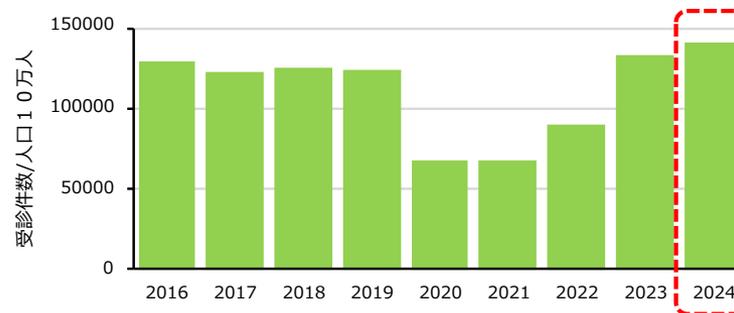


# 抗菌薬使用量増加の背景として、不適正使用の増加よりも、感染症の流行状況や受診状況による影響であると考えられる

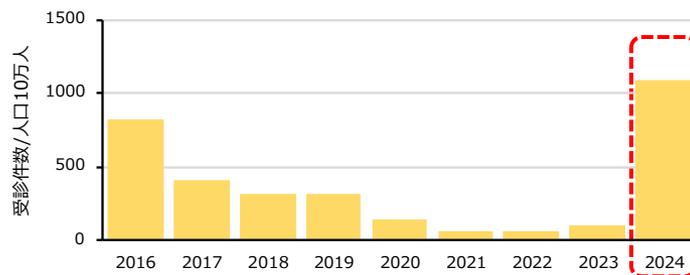
1. 欧州諸国との抗菌薬使用量比較（2023年時点）



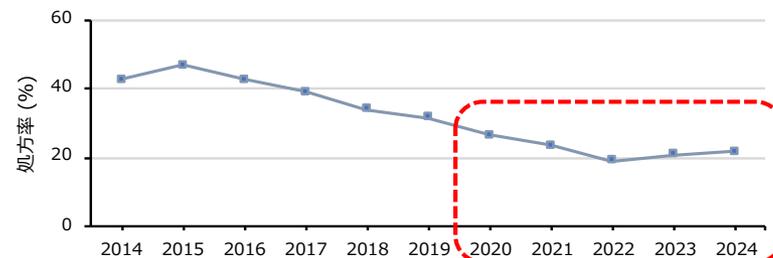
2. 急性気道感染症受診件数の推移



3. マイコプラズマ感染症の受診件数の推移



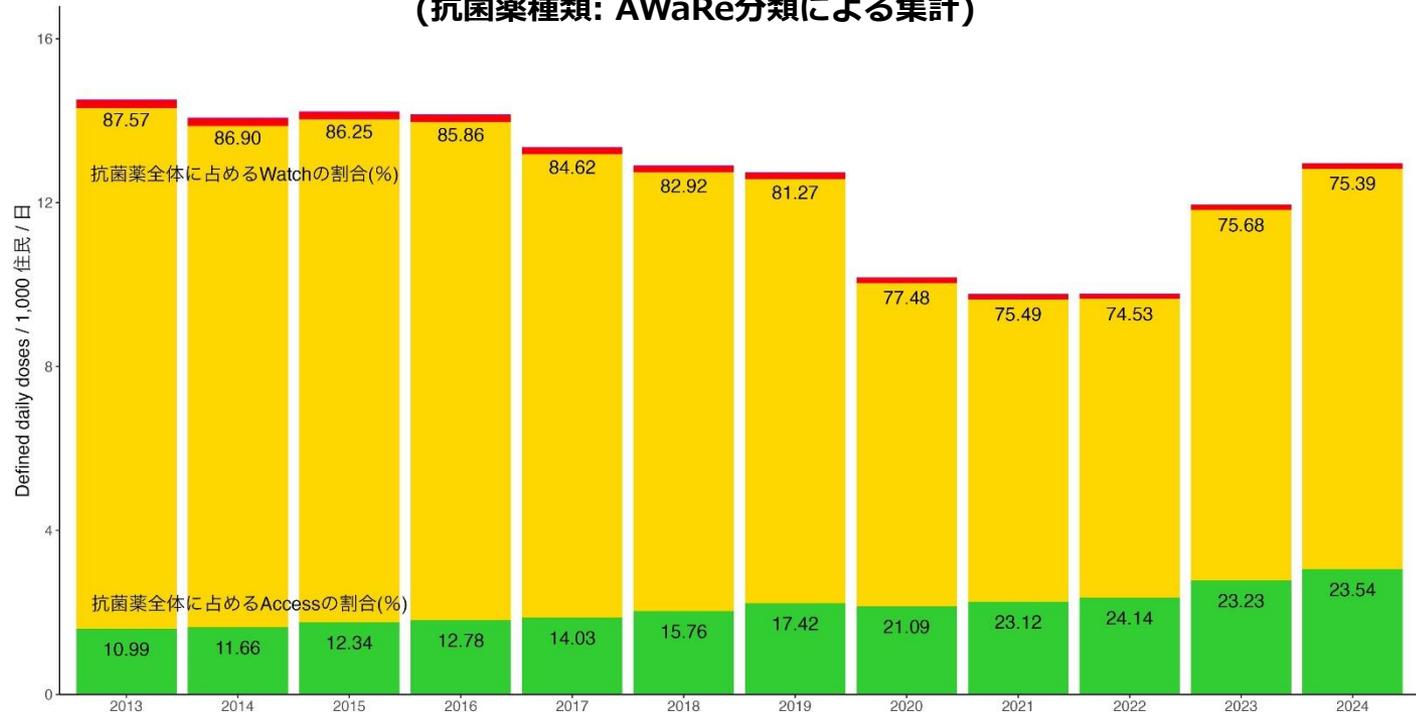
4. 急性気道感染症への抗菌薬処方率



1. 日本の抗菌薬使用量は欧州諸国と比較しても少ない
2. 急性気道感染症の受診件数は2020年・2023年と比較して増加
3. マイコプラズマ感染症の増加に伴い、マクロライド・フルオロキノロンの使用量も増加したと考えられる
4. 急性気道感染症に対する抗菌薬の処方率は、大きな増加は認められない  
→感染症の流行状況を含む、個別の診療における質の変化を評価する必要がある

# 人用抗菌薬販売量にしめるAccess抗菌薬の割合は 上昇傾向にあるが、60(70)%には届いていない

全国抗菌薬販売量推移 2013-2024  
(抗菌薬種類: AWaRe分類による集計)



## AWaRe分類とは？

AWaRe分類 ■ 未分類 ■ Not recommended ■ Reserve ■ Watch ■ Access

- WHOが推奨する、抗菌薬適正使用のために用いられる分類
- Access: 一般的な感染症の第一選択薬 Watch: 耐性化が懸念されるため限られた適応に使うべき薬、Reserve: 最後の手段として保存する薬
- WHOは抗菌薬全体に占めるAccessの割合が60%以上になることを目標に定めている  
さらに2024年の国連総会ハイレベル会合において、2030年までに70%を目指すことが掲げられた

## 注意！

- 本サーベイランスで公開されているデータは  
実際の医療現場での抗菌薬使用実績をそのまま示すものではありません。

# 抗菌薬適正使用の課題と方向性

1. 内服用抗菌薬の使用量は2023年以降反転して増加、2024年も増加がみられた
2. 注射用抗菌薬の使用量はほぼ横ばいだが、カルバペネム系抗菌薬の使用量は低下
3. 抗菌薬使用量に占めるAccess比率は上昇傾向だが、WHOの目標値である60  
(70) %とは開きがある



1. 上気道感染症、下痢症において、不必要な抗菌薬使用を更に削減
2. 様々な医療データの利活用を行い下記を実施
  1. 感染症の流行状況を含む、個別の診療において質の変化を含めた評価
  2. デエスカレーションや内服切替、TDM等治療の質を含めた評価
  3. 処方率の動向も追跡対象とする

## 「目標6 国際協力」に関する活動

### 国際社会において日本がAMR対策の責任を果たすための活動

- 2016年に世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局及びWHO東南アジア地域事務局と「アジア抗微生物剤耐性（AMR）保健大臣会合」を共催し、アジア太平洋ワンヘルス・イニシアティブ（ASPIRE）を開始
- 2017年以降、ASPIREイニシアティブを通じてアジア太平洋地域におけるAMR対策を推進するため、東京AMRワンヘルス会議を開催
- ASPIRE のWGを通じてアジア諸国の抗菌薬規制およびアクセス状況を確認
- 今後アジア諸国に対して抗菌薬適正使用におけるプログラムやセミナーを実施し貢献していく